堀辰雄の対他意識の変遷について（二）

―『風立ちぬ』を中心に―

山本裕一

一　はじめに

『風立ちぬ』は、昭和十一年から十三年にかけて各紙に連載され、昭和十三年四月、野田書房より刊行された、堀辰雄の中期を代表する作品である。この作品は、堀の実体験をもとにして書かれており、「我々の生は我々の運命より以上のものである」という堀終生のテーマの最初の結実が見られる。「『生』と『死』と『愛』のテーマを鮮やかに結晶させ」た作品（注一）、「愛と死と視の小説」（注二）などと評価されることが多い。

しかし、この作品は本当に死を前にした逆説的な生の充溢、死の意識からした生命の認識を描いた作品なのか。私はどうしてもそのような定説に対する違和感を禁じ得ない。この作品を通読して私が感じたのは、むしろ生や死の問題とは別箇の、思いとは違った方向へと運命づけられていく現実に対する「私」の苛立ちと不安であった。

もちろん、前述の受け取り方に対して異論を唱えたいと感じたのは私だけではない。たとえば、竹内清己氏は、その論文の中で（注三）堀辰雄の文学を「病気―弱者―善の文学」ととらえる受け取り方を逆転して、「健康―強者―悪の文学」と置き換える見方を提示されている。私もかなりの部分で氏の意見に賛同するものである。しかし、私が見出したのものは、氏の言われるような「他者支配の意志」「他者離隔」への潜行というものではない。むしろ、堀の「他者との同化への志向」と「幻想的な世界の構築とその挫折」である。そこで以下、作品中に描かれた他者に対する「私」の意識を手がかりに、私見を述べてみたい。

二　「私」の幻想的世界への憧憬

―「春」を中心に―

『風立ちぬ』は「序曲」「春」「風立ちぬ」「冬」「死のかげの谷」の五章からなっている。竹内氏は前述の論文中で次のように述べている。

「序曲」と「死のかげの谷」は、作者が最終的にすでに到達しえたところから発想されたものの方向づけとし

てあるのであり、「春」は「風立ちぬ」「冬」の世界の前提であるから、作品のモチーフ、テーマが生きられ達成される現場は、なによりも「風立ちぬ」「冬」の二章にあった（後略）

確かに氏の言われるように作品の中心は「風立ちぬ」「冬」の二章であろう。しかし、「春」の章は前提としてその二章の発表後に付け加えられた章（注四）である。堀は前提として必要だと考えたからこそこの章を書いた。だとすれば、この章の中に作品を読み解く鍵がありはすまいか。

この章には、節子の発病とそれに伴って「私」が療養所に行くことになる経緯が描かれている。その中で、サナトリウムへ行くのかという「私」の質問を皮切りに、次のような会話が二人の間で交わされている。

「ええ、かうしてゐても、いつ良くなるのだか分からないのですもの。早く良くなれるんなら、何処へでも行つてゐるわ。でも……」

「どうしたのさ？なんて言ふつもりだつたんだい？」

「なんでもないの」

「なんでもなくつてもいいから言つて御覧……どうしても言はないね、ぢや僕が言つてやらうか？お前、僕にも一緒に行けといふのだらう？」（「春」、引用1）

これ以前の父とのやりとりから、節子と同行してほしい父の意向を酌んだ発言としてここまでは理解できる。しかし、これに続く展開に私は奇異の念を抱かずにはいられない。

「そんなことぢやないわ」と彼女は急に私を遮らうとした。

しかし私はそれには構はずに、最初の調子とは異つて、だんだん真面目になりだした、いくぶん不安さうな調子で言ひつづけた。「……いや、お前が来なくともいいと言つたつて、そりあ僕は一緒に行くとも。だがね、ちよつとこんな気がして、それが気がかりなのだ。……僕はかうしてお前と一緒にならない前から、何処かの淋しい山の中へ、お前みたいな可哀らしい娘と二人きりの生活をしに行くことを夢みてゐたことがあつたのだ。お前にもずつと前にそんな私の夢を打ち明けやしなかつたかしら？（中略）実はね、こんどお前がサナトリウムへいくと言ひ出してゐるのも、そんなことが知らず識らずの裡にお前の心を動かしてゐるのぢやないかと思つたのだ。……そうじやないのかい？」（「春」引用2）

先の彼女の「でも」の後には、「本当に良くなるのかしら」というような病気に対する不安を漏らす言葉が予測される。しかし「私」はそれを強引に自分の夢の話へと持っていく。あるいは彼女の言いたいことが「私」にも分かっていて、深刻な話にならないよう話をはぐらかす意味で、彼は夢を語ったのかもしれない。この直後、節子が「いたわるような目つきでしげしげと」「私」を見ており、結果として二人が「何事もなかったよう」に外を眺めだすのだから、そう解釈することも可能であろう。しかし、彼女にしても「あなたはとき

どき飛んでもないことを考へ出すのね……」と言わざるを得ない、突飛な話なのである。

なぜこのような話に持って行く必要があったのか。

この「私」の夢の話は、「数年前、瘻々」好んで夢見てものとして「冬」（十一月十日）や「死のかげの谷」（十二月一日）の中にも詳しく書かれている。そしてそれに続く部分には彼がまだその夢から脱却し切れていない様が描かれている。たとえば「冬」では次の通りである。

今朝、私はさういふ自分の数年前の夢を思ひ出し、そんな何処にだつてありさうもない版画じみた冬景色を目のあたりに浮べながら、その丸太造りの小屋の中のさまざまな家具の位置を換えたり、それに就いて私自身と相談し合つたりしてゐた。（「冬」引用3）

「冬」では節子の病はかなり重くなっており、その死はもはや「春」の段階とは比較にならぬほど現実のものとして彼らに迫りつつある。しかし、彼はその夢を「何処にだつてありさうにない」ものと考えながらも、いまだにそれを追いつづけている。そして、夢の光景がばらばらになり、ぼやけて消えて行ったあとも、しばらく現実の冬景色と夢の背景である冬景色とを重ねて見ているのである。このことからも、彼がまだ夢から脱却できていないことは明らかであろう。

この執拗に夢を見続けているものとして「私」を描いているという事実、またその事について「自分の小さい時から失はずにゐる甘美な人生への限りない夢」と「私」の資質にかかわるものとして提示していることから、それだけ堀は（意識的にか無意識的にかはわからないが）この「夢」に固執していたと言えるだろう。「私」の夢という所からは少しズレるが引用1、2と同じような構図は、「私」が医者から節子の病状を聞き、放心状態になっている場面でも繰り返されている。

私の背後で、病人のすこし嗄れた声がした。それが不意に私をそんな一種の麻痺したやうな状態から覚醒させた。私は彼女の方には背中を向けたまま、いかにも何か他のことでも考へてゐたやうな、取ってつけたやうな調子で、「お前のことだの、山のことだの、それからそこで僕達の暮らさうとしてゐる生活のことだのを考へてゐるのさ……」と途切れ途切れに言ひ出した。が、そんなことを言ひ続けてゐるうちに、私はなんだか本当にそんな事を今しがたまで考えてゐたやうな気がしてきた。

（「春」引用4）

「私」はこの後、人生というものは「何もかもそれに任せ切つて置いた方がいいのだ」そうすれば「希はうなどとは思いも及ばなかつたやうなもの」まで与えられるかもしれないと考え、それらの思考をしていることに「少しも自分では気がつかずに」いたのだと思い込もうとする。もちろん、彼の頭を支配していたのは直前に医者から聞いた節子の病状であろう。それは節子を「病人」という呼称で呼んでいることからもみてとれる（注五）。そしてその言葉は「いかにも何か

他のことでも考へてゐたやうな、取ってつけたやうな調子」なのだから、これは話を逸らすための単なる思いつきである。先の引用1・2同様、節子が口にしてしまいそうな病気に対する不安を、「私」の山での生活を夢見る話でそらしているのである。

先の引用1・2では山の生活に夢を重ねていた。ここでも彼は山での生活に意識をそらしている。（これは「冬」（引用3）に至っても変わらない。「私」は結核＝死病＝節子の死という認識を敢えて避け、現実と夢の世界を重ねてみてゐる。本来サナトリウムでの「生活」は死に直面するものであり、「嗄れた声」で常に死に対する不安を露わにしている節子の反応（三節で後述）が一般的であろう。しかし、「私」は深く考えることもなく、夢に逍遙するのである。

「私」はサナトリウムに昔夢見ていたような甘い生活の実現をみているのであって、これは現実をしっかり踏まえた認識であるとは言い難い。もちろん、考えてどうなるという問題ではない。いたずらに病気や死を恐れるのは節子の不安を大きくするだけであろう。しかし、彼の思考がこの作品についてよく言われるような、死という厳しい現実を踏まえたものではないことは確かであろう。彼は「夢」に固執することによって現実から遊離するものとして強調して描かれている。これこそが見のがしてはならない作品をとく鍵なのではないか。

三　節子の「死による別離」への不安

―「春」を中心に―

『風立ちぬ』全編を通して（神の視点から）節子の内面が叙述されることはない。その内面は、あくまで「私」が感じたものとして提示されている。たとえば次の通りである。

（前略）ときどき私がそっちへ顔を上げると、さっきからぢっと私を見つめつづけてゐたかのやうに私を見つめてゐることがある。「かうやってあなたのお側にゐさえすれば私はそれで好いの」と私にさも言いたくってたまらないでゐるやうな、愛情を篭めた目つきである。

（「冬」十一月二日　引用5）

ここでもあるいは本当に節子がそう思っていると考えていいのかもしれない。しかし、それを「私」という語り手に語らせていることに着目すれば、これは「私」の勝手な思いこみにすぎないのだと堀は描いているという解釈もできる。そこで、まず客観的な判断が可能な、節子自身の言葉と行動から、節子の内面を推測してみたい。

「春」には三つの場面で節子と「私」の会話が描かれている。一つ目は、サナトリウム行きを決める場面（引用1・2）、二つ目が四月の中庭での場面、三つ目が、出発前、医師の診断を聞いて私が衝撃を受けている場面（引用4）である。一つ目の場面では帽子をめぐってのたわいない話のほかは前節（引用1・2）で引用、要約した通りであり、彼女の内面を推測できるようなものはない。

二つ目の場面では恋人同士のたわいない話の後、彼女が「私」の肩にもたれかかり、小声で次のようにつぶやく姿が描かれていて、病気とその結果としての死を強く意識している節子の内面がうかがわれる。

「私がこんなに弱くつて、あなたに何んだかお気の毒で……」彼女はさう囁いたのを、私は聞いたといふよりも、むしろそんな気がした位のものだつた。（中略）「どうして、私、この頃こんなに気が弱くなつたのかしら？こなひだうちは、どんな病気のひどいときだって何んとも思はなかつた癖に……」とごく低い声で、独り言でも言ふやうに口ごもつた。（中略）そのうち彼女が急に顔を上げて、私をぢつと見つめたかと思ふと、それを再び伏せながら、いくらか上ずつたやうな中音で言つた。「私、なんだか急に生きたくなつたのね……」／それから彼女は聞えるか聞えない位の小声で言ひ足した。「あなたのお陰で……」（「春」引用6）

一つの言葉ごとに「気がした位のものだつた」「ごく低い声で」「聞こえるか聞こえない位」と繰り返されており、節子のか弱さ、心細さが強調されている。この繰り返しによって全体が幻覚のような雰囲気を帯びるが、上ずった中音で発言された三つ目の言葉はそれに伴う節子の仕草から確かなものであろうと考えられる。ここの「生きたくなった」は裏返せば「死にたくない」であり、「死」の存在が彼女の中で大きくなっていることがわかる。しかし、病気のひどい時でも何ともなかった彼女が「弱くなった」というのだから、それは死に対する恐怖ではなく、死による「私」との別離に対する恐怖であることがわかる。これは三つ目の場面でも同様である。引用4に続く部分で、節子は「嗄れ」た声、「中性的な」声で「私」に接し、「いま泣いていらしつたんでせう？」と問う。そして「わかつてゐるの、私にも……さつき院長さんに何か言はれていらしつたのが……」という前提の下に彼女は「私達、これから本当に生きられるだけ生きませうね……」と「私」に語りかける。院長の話を前提に「生きられるだけ」というのだから節子は自分の寿命が残りわずかであることを覚悟している。その上で「私達」という形でその間を生きていたいというのであるのだから、節子は死そのものより、「私」といる時間を失うことが恐いのである。

このことは後の章の中からも推測できる。たとえば「風立ちぬ」の章の夜中患者が死ぬ騒ぎが起こる場面では、節子は「大きく」目を見開いて無言のうちに強く私を求めている。彼女は近づいた私に「まだ大丈夫よ。」と告げるが、「まだ」という言葉に節子が自分の死を強く意識していることを読み取れよう。また、その彼女は「いつもに似ず」「気弱さうに」「そこにゐて頂戴。」と「私」に告げる。ここには「私」を希求する節子の気持ちがあらわれている。いつもはそうでないというのだから、これは普段彼女が私に隠しているその内面の吐露だと考えていいだろう。あるいは、ここだけでは単に死を恐怖した結果だと考えられるかもしれない。しかし、同

じ章の終わり近くの彼女の言葉はこのことをより詳しく物語っている。

「（前略）若しあなたが私のそばに居て下さらなかつたら、私は本当にどうなつてゐたでせう？（中略）あなたがもうお帰りになると私の思ひ込んでいた時間をずうつと過ぎてもお帰りにならないので、しまひにはとても不安になつて来たの。さうしたら、いつもあなたと一緒にゐるこの部屋までがなんだか見知らない部屋のやうな気がしてきて、こはくなつて部屋の中から飛び出したくなつた位だつたわ（後略）」彼女はだんだん嗄れたやうな声になりながらそれを言ひ畢へると（中略）私をぢつと見つめた。（「風立ちぬ」引用7）

ここには死の意識とは切り離された「私」の不在による恐怖が語られており、彼女にとって最も恐ろしいのは死ではなく、私を失うことであることが理解できよう。

なお、ここで引用した文章内には「中性的な」「嗄れた声」が何度も現れているが、これらは、作品全体にわたって、いずれも彼女が死を意識したときに使われている。

1　医師に何か聞いた私に泣いているのではないかと気遣い話しかける場面（「春」）

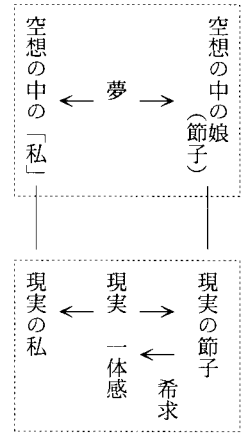
2　サナトリウムに着いた日の（自分が棺の中にいたという）夢について話し掛けようとする場面。（「風立ちぬ」）

3　美しい夕日に（「死んで行こうとするものの眼」にうつる）美しさを感じる場面。（「風立ちぬ」）

4　「私」を待ち焦がれて不安になり、部屋を飛び出して「私」の「私達の生活、ずつとあとになつて思ひ出したらどんなに美しいだろう」という言葉を思い出した時。（「風立ちぬ」引用7、言葉は後略部分にある）

1は前述のように「生きられるだけ生きませうね」という言葉で締めくくられている。2、3はいずれも後の叙述によって括弧内に入れた意味が分かるという形になっているが、いずれも節子が自分の死を意識してのものであることは明白である。3の場面では節子の「そんなにいつまでも生きてゐられたらいいわね」という言葉が発せられる。4でも「ずっとあと」では彼女は生きていないのだから、これらは現前する「死」の事実を節子が認めた時、涙声に変わること（心境の変化）を表現したものといえよう。この「嗄れた声」に象徴されるように、節子は確実に歩みを進めつつある「死」の存在を絶えず意識している。そして「私」との別離を恐怖しているのである。（注六）

以上述べてきたように節子は強く死を意識し、死までの間の私との一体感を望んでいる。この事は前節で述べてきた「私」の認識と明らかに差がある。試みに図示すれば次のようなものになろう。



前述で述べたように「私」は「夢」を夢想しつづけ、しばしば現実の自分と夢の中の自分を同一視している。一方、節子は死によって引き裂かれるまで彼と一緒にいたいと現実の生活での一体感だけを希求している。この二人が死によってではなく、その認識の違いから引き裂かれて行くドラマが『風立ちぬ』の世界である。

高橋英夫氏はその論文「二人称の余韻」（注五参照）の中で次のように言う。

（前略）『風立ちぬ』での二人称は、はげしく一体化を希求しながら、そのはげしさの故にかえって一体化から運命的に引き裂かれていって、永遠の「私」と「お前」でありつづけなければならなかった愛を申し分なく表現しているというべきだろう。

二人称の問題だけに限らず、この作品は「一体化」から「引き裂かれていく」「愛」を描いている。しかしその原因は希求のはげしさだけではない。二人の意識の差（一体化の対象が、節子と私で違ってしまっていること）も大きな要因であろう。次節ではこの点について、「風立ちぬ」以降の章について、特に節子に対する「私」の意識を考察する。

四　「風立ちぬ」「冬」での節子に対する意識の変化について

「風立ちぬ」の章では、二人がサナトリウムに到着してから秋までの期間が描かれている。この章の冒頭近くには次のような叙述がある。

はじめのうちはふたりはその度毎に目と目で微笑みあったが、しまひにはただ不安さうに互を見合つたきり、すぐ二人とも目をそらせた。

ここでは二人は新しい生活への不安を共有している。ここで「二人とも目をそらせた」とあるようにお互いに対する態度は共通しているが、この後に続くサナトリウム到着とその翌日の場面でも、一人がその不安を言い出そうとするともう一人がそれを言わせまいと口に、指を当てる、という行為が相手を代えて行われており、その態度の共有には二人の一体感が感じられる。その後、二人は「時間から抜け出したやうな日々」にあって「少し風変わりな愛の生活」をはじめるのだが、そこで「私」は次のように感じている。

（前略）こんなささやかなものだけで私達がこれほどま

で満足してゐられるのは、ただ私がそれをこの女と共にしてゐるからなのだ、と云ふことを私は確信して居られた。（「風立ちぬ」引用8）

これは「私」が医師に節子の病状の悪いことを聞いた後の叙述である。然し、「私」は「春」の時のように動揺もせず、節子との時間の共有に「満足」しており、それは「確信」でさえある。この少し後ろでも、彼女が熱を出した時は「私たちのいくぶん死の味のする生の幸福」がいっそう「完全に」保たれたと断定しており、「私」の中で、二人の一体感は揺らいではいない。この一体感こそが前節でみた節子の求めるものであり、二人は前掲の図式の下部にあって、その世界を共有している。そのことは次の引用に見られる「私」の感覚にも象徴的に表現されているであろう。

「（前略）あのとき自然なんぞをあんなに美しいと思ったのはおれぢやないのだ。それはおれ達だつたのだ。まあ言つて見れば、節子の魂がおれの眼を通して、そしてただおれの流儀で、夢みてゐただけなのだ。……それだのに、節子が自分の最後の瞬間のことを夢みてゐるとも知らないで、おれはおれで、勝手におれたちの長生きした時のことなんぞ考へてゐたなんて……」

（「風立ちぬ」引用9）

節子の末期の眼を「私」が共有することなどありえない。しかし私が節子のほんの少しの変化を感じたことは確かであり、二人の心はきわめて近い。少なくとも「私」はそう確信していて疑っている様子もない。このような節子と同化したような感覚は心理的な面だけでなく、身体的なものとしても書き込まれている。

私は彼女が眠りながら呼吸を速くしたり弛くしたりする変化を苦しいほどはつきりと感じるのだつた。私は彼女と心臓の鼓動をさへ共にした。ときどき軽い呼吸困難が彼女を襲ふらしかつた。そんな時、手を少し痙攣させながら咽のところまで持つて行つてそれを抑へるやうな手つきをする（中略）／そんな晩など、自分もいつまでも寝つかれずにゐるやうなことがあると、私はそれが癖にでもなつたやうに、自分でも知らずに、手を咽に近づけながらそれを抑へるやうな手つきを真似たりしてゐる。（後略）（「風立ちぬ」引用10）

「私」は節子の呼吸の変化や心臓の鼓動を感じるのみならず、その病気さえ共有しようとする。節子が病気に苦しむその手つきが「癖になつ」ていることはそれが一回性のものではないことを示している。したがって彼は入院してからあたかも節子とその身体を共有しているかのごとき感覚の中にあったのであり、一体感は強い。

しかし、このような節子との一体感は、しだいに失われていく。その契機となっているのは一つには患者の死である。立て続けに患者の死を強く意識させられた「私」はある日「病人の顔をまともに見られずに」いるようになる。私は

「お互いに分たれない不安や恐怖を抱きはじめて」「別々にものを考え出」しているとの意識を抱くようになっているが、それが花を摘む看護婦に患者の死を想像したことに始まり、節子の棺の中にいたという夢の話で終わることから、節子の死を予測してのものであることに間違いはない。それが彼女との一体感を妨げている。もう一つの契機としては、節子の父の来訪が挙げられる。父の来訪を告げた後、「私」は節子に「いつも父の前でのみ浮かべるらしい少女らしい微笑の下描きのやうなもの」を認める。父の来訪は節子の少女らしさを引き出し「見知らない」少女の印象を「私」に与える。私の意識は、それまでのような「私たち」ではなく、「病人」「少女」と「私」という認識になっており、一体感は失われてしまっている。この直後、節子は絶対安静に陥るが、それを抜けた後の私の感慨は次のようなものである。

そうして私たちは（中略）いましがたまで私たちを肉体的ばかりでなく、精神的にも襲ひかかってゐるやうにみえた危機を、こともなげに切り抜け出してゐた。少なくとも私達にはそう見えた。……

（「風立ちぬ」引用11）

「少なくとも」「そう見えた」という表現は、自分達の見知らぬところでの危機存在を暗示する表現である。ここにはすでに見たような二人の幸福な一体感に対しての「確信」はうすれている。

このように「私」が節子との同化を望むことをやめ、節子を他者として認識した時から、（「私」の目から見た）二人の意識のすれ違いが作中に描かれるようになる。そして「私」は自分達の生活の「生の愉しさ」を「確実なもの」にすべく、小説の構想を練りはじめる。このことは現実の「生の愉しさ」が確実ではなくなった（二人の意識がすれ違うようになった）から、それを別のところでつかもうともがいていると解釈できるのではあるまいか。「私」は現実の節子ではなく、夢想の中の節子に話しかける。その物語では、ちょうど冒頭で二人がそうであったように「私」は「果てしがないやうに」思われる時間を生きている。彼の書く物語は「私たちの生の幸福を主題にした」物語であり、「私」は次の「冬」の章でも「二人の人間がその余りにも短い一生の間をどれだけお互に幸福にさせ合へるか」という主題で自分達の生活を描こうとする。「それを措いて、いまの私に何が描けるだらうか」（十月二十七日）とまで考えている。つまりこの物語は現実の生活の代替物である。その性急さは喪われた一体感を求める性急さなのである。少し後ろになるが、次のような叙述がある。

が、それとは別に、私はそれを読み続けてゐる自分自身の裡に、その物語の主題をなしてゐる私たち自身の「幸福」をもう完全には味はへさうになくなってゐる、本当に思ひがけない不安さうな「私」の姿を見出しはじめてゐた。さうして私の考へはいつかその物語そのものを離れ出してゐた。（「冬」十一月二十日　引用12）

（論者注「それ」は、作中作として描かれている二人の

生活の物語のことである）

ここを見ると「私」が以前現実に感じていた「幸福」、今では失われてしまった節子との幸福な一体感を味わうためにこの物語を書いたことは容易に推測できよう。しかし、その物語の中の「幸福」は現実の節子の容態を前に「確かなもの」になりえない。彼は、物語に没入できず、現実に戻ることを余儀なくされている。

この後、彼は「高く狙い過ぎ」たのか「おれの生の欲求を」「見くびり過ぎ」たのかと考えている。現実に満足できず現実の節子を他者と感じ、物語の中の節子と同化しようとした「私」の生の欲求が、現実の節子との一体感を逆に喪わせることになってしまったのであることは間違いないであろう。

小説を書いて行く一方で、私は過去の世界にも惹かれていく。彼は森の中で彼女の後ろを歩きながら、二年前の夏の体験と現在の自分を重ね（十月二十七日）、昔の夢に逍遥し、現実に夢の背景を重ねてみたり（十一月十日）、現実の景色に過去の光景を重ねてみたりしている（十一月二十日）。彼が節子の死という現実から逃避し、幸せな記憶の時間に身を置こうとするのは、小説の世界に自分達の幸福を「確かなもの」として定着しようとした態度に通ずるであろう。「私」がこれらの過去の記憶や物語世界にのめり込んで行くことによって、物語の冒頭において、前掲図の下部で一体化していた二人は、夢（物語）の中の私に同化しようとする私と現実に一体感を求める節子に別れていく。その結果、節子は一体感を失い二人の仲は乖離していくのである。

「冬」の章では「冬」から節子の死の少し前までの生活が日記体で書かれている。そこではもはや二人の間に一体感はない。そのことが「風立ちぬ」の章と対照的な表現によって書きこまれている。たとえば「風立ちぬ」の章の冒頭近くでは、二人が同じ光景を見ながら同化したような感覚（引用10）や、呼吸困難を共有するような感覚（引用11）が語られていた。しかし、この文章の冒頭では、栗の落ちる音を聞いても、「私」にはそれが何だか分からず、節子には節子には分かっている、という状況が提示されている。また、病人の咳を「私」は「不安な気持ち」で聞くばかりで、彼女と同化するような感覚は描かれていない。（十月二十七日）。サナトリウムに着いた直後の彼であれば、それがあたかも自分のように感じ模倣さえしただろう。しかし節子はすでに死にゆく他者として認識されているのである。彼女の目のまわりの痙攣にも「私」は不安を感じるだけである。（十一月十七日）

この二つの章には冒頭付近以外にも表現の照応が見られる。二つの章の終わり近くでは、それぞれ父の来訪と、山肌に父を見出す節子の姿が描かれており、そこで話される節子の言葉もまた対比的に描かれている。

どんなに体の悪いときでも、私は一度だつて家へ帰りたいなんぞと思つたことはないわ。

（「風立ちぬ」引用13）

「お前、家へ帰りたいのだらう?」（中略）彼女は殆どすげないやうな目つきで私を見つめ返してゐたが、急にその目を反らせながら、／「ええ、なんだか帰りたくなつちやつたわ」と聞えるか聞えない位な、かすれた声で言つた。（「冬」十二月五日（「風立ちぬ」引用14）

この二つの場面では、まったく正反対といっていい反応が描かれている。「すげない目つき」は私の言葉に対する無言の非難であろう。節子の言葉にしても、本心から言ったものでないことは「目をそらせ」て言っているところからもわかるが、「風立ちぬ」の章では私を気遣い、また一度も帰りたいと思わなかったと明言していた節子がこのような言動をとること自体、私との一体感がもはや修復不可能であることは明らかである。また節子は孤独の中で死を覚悟し、「私」ではなく父にその理解者を見出している。もはや「私」は死に至る節子の心の支えでもなくなっている。

「風立ちぬ」の章と「冬」の章にはこれまで見てきたように二人の心の乖離していく様、それに対する私の心の動きが、明確に示されている。しかしその背後に前述のような意識の差が原因としてひかえている以上、解決は難しい。堀はこの問題にどのような解決をつけたのか、次に終章を見ていくことにする。

五　終章「死のかげの谷」における「私」の心情の変化

終章は節子の死から約三年半後のこととして書かれている。しかし、先にも述べたように「私」はまだ「夢」に対するこだわりを捨ててはいない。小屋の中に寝台などが二人分あるのを見て「丁度お前と私とのためのやうに」置いてあると感じ、「お前と差し向かひの寂しさで暮らすことを、昔の私はどんなに夢見てゐたことか」と回顧する（十二月一日）。そして別な日には「あたかも」節子が「小屋の中に居でもするかのやうに想像し」て独り言を言い、今は亡き節子が足音をたてるのを気遣ってさえいる（十二月五日）。そしてそれに続く場面では、次の様に感じている。

そのとき殆ど同時に、私は自分のすぐ傍に立つたまま、お前がさういふ時の癖で、何も言はずに、ただ大きく目を睜りながら私をぢつとみつめてゐるのを、苦しいほどまざまざと感じた。（十二月五日　引用15）

ここでも彼は亡くなった節子の不在をいまだ現実のものとして自覚していない。彼は節子のそういう時の「癖」を「苦しいほどまざまざと」感じている。このことは「風立ちぬ」冒頭の「癖」の描写を想起させ、当時の彼の節子との一体感を連想させる。しかしそれはあくまで彼女と感覚を共有していた頃の記憶の中のものである。彼は自分の創り上げた幻想の世界の中に住み、幻想の中の自分と自分を同一視することで彼女との一体感を得ている。これは「風立ちぬ」「冬」で見てきた「私」の認識――現実に同化の対象（節子）を失って、物語や過去の中の自分と現在の自分を同一視することで幻想の中に幸福を見いだす――と一致している。

しかし、いつまでもそうやって自分をだませはしない。十二月七日の散歩で「すべての物が既に失はれて、いまの自分に何一つ残つてはゐないこと」を悟ってからの彼は「どういふものか、お前がちつとも生き生きと私に蘇つて来ない」ので堪らない心境になる。そして「たとひわれ死のかげの谷を歩むとも禍害をおそれじ、なんぢ我とともに在せばなり」と自分にいって聞かせるが、「ただ空虚に感ぜられるばかり」であった。これは、節子の死という現実を彼が認識しつつあり、幻想に没入することができなくなったことを示している。

記憶が鮮明でなくなるのは、目の前の現実の世界が存在感を増してきたからであろう。荒々しい気持ちになった時だけ彼女が蘇ってくるのは、その時だけ知性の働きが疎外され、現実の世界から意識が遊離するからではないか。また、不在によって高まった彼女との一体化の希求は、彼に「なんぢ我とともに在」すとつぶやかせるが、それが「空虚」であるのは、彼の知性が節子の不在を認識するからなのである。この夢見る感性とさめた知性の二律背反に苦しむ姿は、「冬」の後半でも見られた。そこでは「私」は、現実に求めえない節子との一体感を物語や記憶の中に探り、一方で、節子の病、死という現実を前にしての知性の働きから、それに没入することができずに苦しんでいたのである。このようにみてみると、終章は前二章とその心理の変化に於いてはほぼ同様の経緯をたどっているといえそうだ。だとすれば、終章は前二章の繰り返しに過ぎないのか。

しかし終章には前二章と比べ大きく異なることがある。他者としての節子をはっきりと自覚しているという点である。それはリルケとの邂逅という形で作中にもたらされている。

けふも一日中私は（中略）リルケの「レクキエム」に向つてゐた。未だにお前を静かに死なせておかうとはせずに、お前を求めてやまなかつた、自分の女々しい心に何か後悔に似たものをはげしく感じながら……

（十二月十七日　引用16）

私はそれを一度も振り向かうとはしないで、ずんずん林を下りて行つた。さうして私は何か胸をしめつけられるやうな気持ちになりながら、きのふ読み畢へたリルケの「レクキエム」の最後の数行が自分の口を衝いて出るがままに任せてゐた。

帰って入らっしやるな。そうしてもしお前に我慢できたら、／死者たちの間に死んでお出。死者にもたんと仕事はある。（後略）（十二月十八日　引用17）

引用16では、節子を「未だに」「死なせておこう」としなかった事を後悔している。また、引用17では、「死者たちの間」「死んでお出」「死者にも」と彼女の死をはっきりと自覚し断言している。また引用17の前には自分の背後に足音（おそらくは節子の）を聞く描写があるが、そこでも「私」は「一度も振り向かうとはしない」のであり、そこには現実を直視しようとする覚悟が感じられる。明らかに「私」は節子を他者として自覚し、それまで求めて止まなかった節子との

一体感を持つことを自ら放棄している。これは前章までには見られなかったものである。このことによって、この作品は自意識の痛みを描くだけに終わらず、現実を踏まえた新しい生への出発（これこそが「我々の運命より以上」の生だと論者は考える）という方向性を提示し、その存在は作品を救っている。

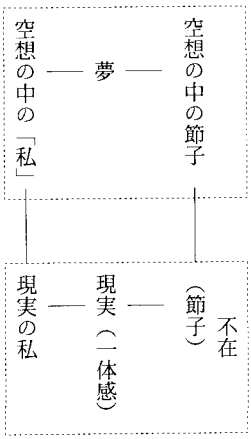
現実を直視し、生きることの決意は何を生みだしたのか。終末近くの場面で、彼は小屋の灯りがずっと下の林まで差込んでいることと、その灯りが小屋から見るとほんのわずかなものにすぎないことに気づき、次のような感懐を抱く。

「――だが、この明りの影の工合なんか、まるでおれの人生にそっくりぢやないか。おれは、おれの人生のまはりの明るさなんぞ、たったこれっ許りだと思ってゐるが、本当はこのおれの小屋の明りと同様に、おれの思ってゐるよりかもっともっと沢山あるのだ。（後略）（「十二月二十四日」　引用18）

それまでは自分の夢ばかり追い続けてきた「私」だが、ここに至ってそれまでの自分の考えとは違う価値観の存在に気づいている。この場面の象徴性をどうとらえるかは、さまざまな意見があって難しいが、自分の人生に於いて「これっぱかり」と過小評価していたものが「もっとたくさん」あってそれが自分を「生かして置いてくれている」という風に発想の転換がなされていることだけは確かだろう。

物語の初めでは幸福な一体感は現実のものであった。やがて現実の厳しさはそれを蝕んで行くが、「私」はあくまでもそれを追い求める。現実の節子との生活に幸福な一体感を感じられなくなると、彼は幻想世界（物語や追憶）を構築し、その中に夢を求めるようになるが、その「私」の思い（激しい「生の欲求」）が、かえって彼を幸福な一体感から疎外することになる、という物語の流れをここまで見てきた。それをここの言葉にあてはめてみると、私の思い（激しい「生の欲求」）から考えると「これっぱかり」の幸福と思われた節子との生活が「もっともっと沢山」の幸福で満たされていて、それがあったからこそ自分は今「生かせて」もらっているんだと気づいたということになる。そして彼は幸福からの疎外感を免れている。

この発想の転換は、十二月三十日には「そんな幸福だとか何んだとか言ふやうなことは、嘗ってはあれ程おれ達をやきもきさせてゐたつけが、もう今ぢやあ忘れてゐようと思へばすっかり忘れてゐられる位だ。」という魂の平安を彼にもたらす。幸福は決して自分が思っていたような形のものでしかないということはない、目を逸していた現実の中にこそ幸福があったのだ、とそう悟ったからこそ、「かつてはあれほど」「やきもき」した自分たちが幸福であるかどうかという問題は無意味になったのである。彼は自分の思いによる呪縛から自由になっている。そしてそれは節子から遊離してしまっていた私の思いが再び節子に向き直ることであり、図1に提示した関係図は以下の様に変化することになる。



（図2）

現実に他者との同化という形での一体感が喪われると「私」は幻想世界を構築し、そこに埋没することによって魂の平安を得ようとする。しかし、それは現実によって常に破られる。幸福な幻想世界に没入することも現実を直視することも出来ず、私は現実と夢の間にあって苦しんでいた。しかし、ここに至って、彼は節子の死を自覚する。彼女と同化するような一体感を持つことだけが幸福だと考えていた彼は、ここでは節子を「死者」として自らに一体化を禁じている。同化の対象ではなく、他者として節子を認めたことによって、逆に節子との生活に生の充溢を感じ、そこに「幸福」を超越した世界を確立するのである。図2中の「私」の位置の変化は夢に激しく希求を持ちながらも現実へと回帰し、現実をふまえた新しい生への出発（現実）を試みる主人公の心の動きを示している。この図1から図2にいたる過程での「私」の苦悩とその苦悩の中から現実を身据えることで「私」の得た魂の平安、それこそが、我々がこの作品から読み取って行かねばならぬものなのではなかろうか。

堀の小説には多く他者に同化し、一体感や幸福を感じる人物が多数登場する。また、自ら創り上げた幻影世界への憧憬をもち、そこに没入せんとする人物が登場する。それらが、堀辰雄の作品に見られる甘さとして批判される一因になっているように思われるが、それはこの作品に於いては払拭されねばなるまい。他者との同化に対する欲求の強さは、かえって現実世界での生の充溢を妨げるものとして認識され、他者を逆に異化することによって、幻影世界から自由になる人物がこの作品には描かれている。そしてそれは「かげろふの日記」をへて「菜穂子」「ふるさとびと」にいたる作品群のなかで探求され、一つの方向へと向かっているのである。

注

(1) 谷田昌平『堀辰雄　その生涯と文学』（花曜社、昭和五八年七月）

(2) 遠藤周作『堀辰雄』（一古堂書店、昭和三〇年十一月）

(3) 「『風立ちぬ』試論―支配の構造―」（語文論叢昭和五六年九月）

ただし、「堀辰雄の文学」（桜楓社、昭和五九年三月）によ

る。他にも堀田善衛「乱世文学者」『文学界』（昭和二十八年　八月号）などがある。

(4)　それぞれの章の発表誌は次の通りである。

「序曲」『改造』昭和十一年十二月号（「風立ちぬ」の一部で「発端」と題されていた）

「風立ちぬ」同右（「発端」「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」の4章に分けられている。）

「冬」『文芸春秋』昭和十二年一月号　新潮社版「風立ちぬ」には右が初出誌と同様の形で独立した二編の短編として掲載されている。

「春」『新女苑』昭和十二年四月号（原題「婚約」）

「死のかげの谷」『新潮』昭和十三年三月

(5)　高橋英夫「二人称の余韻」（『ユリイカ』昭和五三年九月号）では、「風立ちぬ」の中で、節子に対する呼称が様々に変わっていることに対して、その時々にそういった呼称で呼ぶしかない「私」がいる。動いているのは女の方ではなくてむしろ「私」である。つまり、呼称の揺れは、「私」の節子に対する気持ちの揺れを表しているのである。という主旨の指摘がなされている。

(6)　「冬」の章の堀の婚約者矢野綾子の前日の日付のある部分でも「かすれた」声が出てきているが、今回はこれを省いた。